

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、韓国における家政科教育（日本の家庭科）の特に家族・家庭生活領域について、授業を構成する要素である目標（理念）としての教育課程、教材（教育内容）としての教科書、教育内容を主導する指導者、それを学ぶ学習者の4つの要素から、その特質と実態および課題を、日本の家庭科教育課程との比較を通して明らかにしたものである。教育内容の特質や実態を明らかにする場合、多くはこれらの一つの要素に焦点をあてているが、本研究は4要素からその実態を描き出している点で、これまでに無い総合的な視点を持った研究となっている。また教育課程については、戦後60年間という長期にわたる変化を、社会的背景をふまえてその特徴を明らかにしている。これまでの韓国の教育課程の研究では、改訂毎の研究はなされてきたが、このように長期にわたり、かつ男女平等の視点で社会的背景との関連において明らかにした研究は無い。それは日本の家庭科教育の研究成果をふまえ、それとの比較において追求したことによって成しえたものである。さらに韓国の指導者（教師）や学習者の教育姿勢や意識を調査分析によって明らかにしているが、韓国が母国であることの強みと長年にわたる日本での研究生活によって、同レベルで比較できるほどに両国に精通したことから可能になった研究といえよう。本研究のこれらの特徴はこれまでにない独自性となっているばかりでなく、両国の特徴から導き出された家庭科教育の特質と実態は、他諸国の家庭科教育の特質と実態に通じるものがあり、世界に対しても意義ある研究となっている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は序章、第1章～第4章、終章から構成され、第1章～第4章のそれぞれの章では、先に述べた授業を構成する4要素を追究している。第1章「男女の履修形態による中学校・高等学校家政科教育課程の変遷」では、歴史的研究方法にしたがって、1次資料に加えてその変遷の要因を明らかにする副次的資料をも収集し分析している。第2章「韓国と日本の高等学校家庭科教科書における家族・家庭生活領域の内容」では、質的分析方法を援用し、教科書の記述を丹念に比較し、両国の家族・家庭生活の捉え方の相違を明らかにしている。第3章「韓国と日本の家庭科教師における家族・家庭生活意識と家族・家庭生活学習との関連」、第4章「韓国と日本の大学生における性別役割分業意識と家庭科の学習との関連」では、韓国と日本の家庭科教師および大学生を対象にしたアンケート調査から、家族・家庭意識と家族・家庭生活学習との関連を明らかにしているが、その際有意差分析、因子分析、信頼性分析、重回帰分析など、それぞれに適した統計的手法を用いている。すなわち本論文では一つの研究方法に偏ることなく、歴史的研究方法、質的研究方法、量的研究方法など、各章に適した方法を駆使して研究を行っている。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

第1章における家庭科教育の教育課程の変遷では、韓国の教育課程に関する資料の全てを取り寄せるのみでなく、新聞記事などの副次的な資料も精力的に収集し、これまで明らかにされてこなかった男女平等教育へ変わってきた社会的背景を明らかにしている。さらに日本の関連

研究資料も精力的に収集し、それとの比較において韓国の状況を明らかにしている。また、第3章の高校教師の調査では、韓国の普通高校全数を調査対象とし、日本でもそれに対応する全国の普通高校の2/3を調査するなど、精度の高い調査分析を行っている。本論文はそうした資料収集に基づき、日韓両国の豊富な先行研究を踏まえて、慎重で適切な分析がなされている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

第1章では、戦後の韓国の家政科は①男女別履修確立期が、経済復興をめざして男子労働者の技術力の向上に重点を置いた男女別の教科が設定されたこと、②男女共通履修導入期は、国際婦人年の影響で男女平等な教育課程が導入されたが、科目の性別による選択が続いたこと、③男女共通履修確立期になって男女が共に必修として同じ内容を学ぶ実質的な男女平等教育が実現したことを明らかにした。第2章では、韓日の家庭科教科書の比較分析から、両国とも教育課程では家族・家庭生活領域が最も重要視されており、その中では韓国は配偶者の選択と結婚、日本は青年期の自立、子どもの成長と発達を取り上げられるなど、重点を置く内容が相違していることを明らかにした。第3章では、韓日の家庭科教師への調査分析から、韓国と日本で家族領域の中でも重点を置いている内容は相違しており、また、韓国の家庭科教師は女性が仕事をすることに肯定し、また夫婦の親和性を高く評価するほど、家族学習に重点を置いて教えていることを明らかにした。第4章の大学生調査から、韓国では日本より結婚・家族に関心が高く、家庭科教師の結婚と家族を重視する傾向と同様であり、特に韓国の女子は男女平等意識が高いこと、同時に結婚と家結びつける意識も高いことを明らかにした。これら教育の4要素を取り上げて追究した分析から、家庭科の教育課程が教科書という学習教材に反映し、それが授業を主導する教師の意識に、また重点を置く学習の内容に反映し、さらに学習者の性別役割分業観や結婚観などを形成していることを明らかにしており、家庭科の教育の特質と実態を総合的に把握する論文となっている。また各章の中心的な論文はすべてレフリースの学術論文として学会誌に掲載されていることも、その成果が学術的な水準に達していることを十分に証明している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、韓国における家政科教育の家族・家庭生活領域に焦点をあて、その特質と実態を日本の家庭科教育との比較を通して多面的総合的に追究したもので、これまでにない独自性を持ち、世界の学界に対しても意義ある研究となっている。こうしたことから、審査委員5名は全員一致で、本論文を「博士(教育学)」の学位を取得するにふさわしい論文であると判断した。